2023年4月9日　イースター（復活日）礼拝メッセージ

「前向きに生きる」　　牛田匡牧師

聖書　ヨハネによる福音書　20章 1－18節

今日はイースターです。十字架にかけられて殺され、墓に納められたイエス・キリストが、神さまによって死から引き起こされたことを記念する日です。と言っても「何だかよく分からない」というのが実感ではないでしょうか。それこそ「赤ちゃんイエス様が生まれたよ。クリスマス、嬉しいね」の方が、お話としては分かりやすいのではないかと思います。

今回の聖書のお話は、「週の初めの日、朝早く」(1) から始まっています。イエス様が十字架に架けられて殺され、お墓に埋葬(まいそう)されたのは金曜日の夕方でした。現代の私たちの感覚では、一日というのは深夜の0時から24時間と考えられていますが、当時のユダヤ人たちの一日は日没から日没までした。さらにユダヤ教では土曜日が「安息日」でしたので、金曜日の夕方に日が沈むと、土曜日の日没になるまで、人々は働くことが許されていませんでした。ですので、イエス様の周りにいた女性たちや仲間たちは、十字架から下したばかりのイエス様の身体を、きれいに整えることも出来ないまま、慌ただしくイエス様の遺体を、とりあえずお墓に納めたというわけです。そして安息日が明けるまでは、そのお墓を訪問することが出来ませんでした。そのために安息日が土曜日の夜に終わると、日の出るのを待って翌朝早く、足掛け３日目の日曜日の朝早くに、マグダラのマリアはイエス様のお墓に急いで出かけていきました。

当時のお墓は、遺体を布で巻き、そこにいい香りのする香油を塗って、洞窟のような横穴に安置するという方法だったようです。そしてイエス様を納めたお墓の入り口は、大きな石で塞いでありましたから、マグダラのマリアはその石をどうやって動かすつもりだったのでしょうか。「ヨハネによる福音書」にはマグダラのマリア一人の名前しか出てきませんが、他の福音書によると、この時お墓に行ったのは、マグダラのマリアを含む数人の女性たちでした。

ともあれ、彼女たちがお墓に着いてみると、お墓の入り口を塞いでいたはずの大きな石は既に取りのけられていました。つまり、夜の間に誰かがイエス様のお墓を荒らしたということでしょうか。確かに「マタイによる

福音書」には、弟子たちによってイエス様の遺体が盗み出されないように、お墓の前でローマの番兵が見張りをしていたと記されています（27：62－66）。またお墓を封印していた大きな石が動いたのは、女性たちの目の前で大きな地震が起きたから、石が転がったのだ（マタイ 28：2）とも記されていますが、実際はどうだったのか、詳しいことは分かりません。ただ女性たちが着いてみると、お墓は空だった、ということなのでしょう。「ヨハネによる福音書」では、それを見たマグダラのマリアは、急いで仲間の弟子たち、シモン・ペトロたちへ知らせに走りました。

「誰かが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、分かりません」（3）。マグダラのマリアは動揺しています。今、自分に出来ることとして、せめてイエス様の遺体をきれいにしたかったのに、もはやそれすらも出来なくなってしまった……。それを聞いてペトロたちも急いでお墓まで走って行きましたが、男の弟子たちは空っぽのお墓を確認した後、そのまま家に帰ってしまいました。9 節には「イエスが死者の中から必ず復活されることを記した聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである」とありますが、この後に続く 19 節では、「その日の夕方、弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸にはみな鍵をかけていた」とあります。即ち男の弟子たちは、ユダヤ当局による自分達への迫害は、イエス様が処刑されたことで終わったのではなく、そのお墓まで荒らされて、遺体までどこかへ持って行かれたように、この後、自分たちにまでその迫害の手が、及んでくるのかもしれないと、自分達の身を案じて、恐れていたのだということが分かります。

男性たちがそのように怯えて、オロオロと動き回り、ジッとしていられなかったのとは対照的に、女性たちはその場、空の墓の前に立ち止まっていました。それこそ、イエスさまが十字架に掛けられた時も、男性たちは皆、方々に逃げてしまい、十字架を側から見守っていたのは女性たちだけだったのと同じです。そして、「マリアは墓の外に立って泣いて」いました（11）。もはや、どうしてよいか分からなくなっていたのかもしれません。

そこに、み使いが現れ、問いかけました。「女よ、なぜ泣いているのか」（12）。マリアは答えます「誰かが私の主を取り去りました。どこに置いたのか、分かりません」（13）。そう答えながら、マリアは後ろに人の気配を感じたのか、後ろを振り向き、そこに園の番人、園丁と思（おぼ）しき人の姿を認め

て言いました。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか、どうぞ、おっしゃってください。私が、あの方を引き取ります」(15)。しかし、続けてその園庭と思しき人が「マリア」と彼女の名前を呼ばれた瞬間、彼女の目は開けて、その目の前の相手が復活されたイエス様だったということが分かり、「ラボニ、先生」と返事をしました（16)。それから、彼女は他の弟子たちの所へ行って、「私は主を見ました」と告げ、イエス様から言われたことを伝えていきました（18)。

さて、このお話から分かることは何でしょうか。一つは、イエス様の「復活」とは、所謂「蘇生(そせい)」「死んだ肉体が生き返ること」ではない、ということだと思います。もし、死んだ肉体が蘇生(そせい)し、再び元通りに動き出したのであれば、マグダラのマリアは最愛のイエス様の顔を、よその人と見間違えることはなかったはずです。それにイエス様以降の約 2000 年間に亘って、一旦死んだ後から再び動き出して、ずっと動き続けているという人間はもちろん、誰一人としていないわけです。つまり、「復活のイエス様」、死から引き起こされた（エゲーロー）イエス様は、生前の肉体を離れ、ありとあらゆる人の中に、あらゆる人の顔と手を介して、今も生きているということなのだと思います。

もう一つのことは、泣いていたマグダラのマリアが、彼女に話しかける声に応えて後ろを振り向いた時、彼女はそこに復活されたイエス様を見出すことができました。一方でペトロたち男性の弟子たちは、「空っぽの墓」を見て、そこから次に自分たちもユダヤ人たちから危害を受けるかもしれないと予測し、急いで家に帰り、「家の戸にはみな鍵をかけて」(19)、家の中に閉じこもっていました。目の前に今起きていることを認め、そこから将来を予想して対策を講じるというのは、一見「前向き」のようですし、一方では目の前のことに立ち尽くし、泣き崩れているのは、その場に留まっているだけで、「後ろ向きだ」と他人から言われてしまうようにも感じられます。しかし、本当にそうでしょうか。どちらが「前向きに生きている」でしょうか。

以前に聞いた話ですが、「あなたが顔を向けている方向が『前』なのだから、たとえ前後左右、どちらを向いても、『前向きに生きている』ことに違いはない」という話を、印象深く覚えています。私たちは誰しも、生きている限り、親しい大切な人との別れを経験したり、病気や事故、災害や戦争

など、様々な予期しない困難や悲しみに遭遇することがあります。そしてその困難や喪失が深い程、希望を見失い、絶望に打ちひしがれて、その場に立ち尽くしてしまい、顔をあげられなくなってしまうこともあります。現実を認められず、今後の将来なんて考えられなくなることもあるでしょう。そんな時、その人を励まし、元気づけようとして、「後ろ向きにならないで」とか、「下ばかり向いていないで」という言葉が掛けられるかもしれません。しかし、たとえ過去の思い出ばかりに目を向けていたとしても、目の前の現実を直視できていなかったとしても、その人の顔が向いている方向、それが「前向き」であることには変わりはありません。そしてそのような私たちと共に、死を越えられたイエス様は、共にいてくださいます。

泣いていたマグダラのマリアの後ろから、復活のイエス様は話しかけられました（15）。また鍵をかけて家の中に閉じこもっていた男たちの真ん中に、施錠された扉というバリア（障壁）を乗り越えて、復活のイエス様は現れ「あなたがたに平和があるように」と言われました（20：19）。当初、マグダラのマリアは、彼女の後ろに現れた人を「園の番人」や「園丁」と勘違いしましたが、それは墓穴を掘り、遺体を移動させたり、安置したりするという、「死の穢れ」に触れる被差別の労働者でした。まさかそんな人が、あのイエス様だとは思えない……。

復活のイエス様は、まさかそんな所にいるはずがない、そんな人として現れるはずがない、と私たちが思うような所に、私たちの予想を越える形ですでに現れて来られているのでしょう。私たちが後ろを向こうが、下を向こうが、イエス様はいつでも共におられるのだと思います。

今も、この世界では強大な暴力によって多くの血が流され、人々は泣き叫んでいます。イエス・キリストが、その十字架によって贖(あがな)われた罪とは、大昔から続いている、人類の持つ抑圧と差別など、あらゆる暴力の行きつく先である「死」、「命を終わらせるもの」に終止符が打たれたということであり、そして死からの引き起こし（エゲーロー）、立ち上がり（アニステーミ）があり、私たちはそんな「死に打ち勝つ命」「死を越える命（永遠の命）」を生きることができる、ということなのだと思います。

死で終わらない復活の命を生きるイエス様と共にあって、私たちは今日もそれぞれの場にあって「前向きに生きる」道へと、導かれていきます。